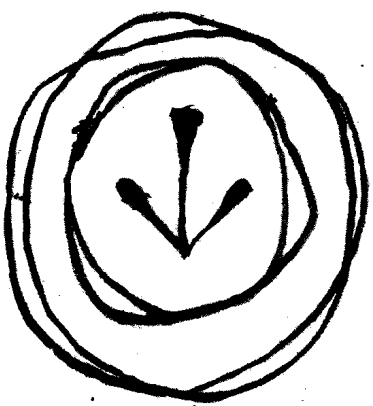
西洋の智慧

亀井勝一郎

西　　志

—私はいかなるとき
いかなる智慧に学んだか—

亀井勝一郎



朝日新聞社

西洋の智慧

昭和三十一年七月二十五日一刷発行　定価二二〇円

著者　©亀井勝一郎

発行者　浜名二正

印刷者　矢板東一郎

発行所　東京都有楽町
大阪市中之島
小倉市砂津
名古屋市広小路
朝日新聞社

印刷・明善印刷株式会社

目

次

1

モーゼの十誡 3
空の空なるかな 21
愛 29
荒野の修業 39
空の鳥を見よ 53
人間は人間を裁きうるか 63
パウロの叫び 73
怯懦の群 83

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ソクラテスの智慧と死　91
エロス　107
死と快楽　115
人間の空虚なること　125
ゲーテとの対話より　139
信仰と性愛の戦ひ　163
民衆の阿片　179
ヴァレリイ一家言より　193
読者のために　209

西洋の智慧

亀井勝一郎

モーゼの十誡

1

モーゼの十誡　3
空の空なるかな　21
愛　29
荒野の修業　39
空の鳥を見よ　53
人間は人間を裁きうるか　63
パウロの叫び　73
怯懦の群　83

「西洋」を学ぶとはどういふことであらうか。わかりきつてゐるやうで、実はいつも混迷してきた明治開国以来の重要な課題ではなからうか。二千年の伝統と文明の重みを持つ西洋文化が、明治以後の短期間に摂取消化されることはむろんありえないことだ。それにもかかはらず我々はこの不可能事に直面し、現在もなほ続いてゐる名状し難い混乱を生きてきた。かういふとき大切なことは、西洋文化の根源をなす思想、源泉思想ともいふべきものにまづ直面することではなからうか。いかなる混乱の中にあつても、見失つてはならないものがあるにちがひない。

日本歴史をふりかへつても明らかだ。上代において「東洋」を学んだときは、周知の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

とほり儒教と仏教といふ源泉思想にまづ直面した。この二大思想の伝来によつて上代史は大きく転回してゐる。思想が時代をつくるのだ。同様に、現代において「西洋」に立向ふときには、必ずキリスト教とギリシャ精神に直接参入しなければならないのは当然であらう。明治以来この二つの源泉思想に学んだ人はむろんゐたわけだが、日本人として受けいれた筈の「西洋」のすべてを通してこれが貫直してゐたか、裏づけになつてゐたか、といふ点になると全く支離滅裂であつた。西洋の科学、芸術、哲学、その他あらゆるものがうけいれられたが、源泉思想といふ点からみて、それらの相互関係は分裂してゐた。たとへばキリスト教と科学はどういふ関係に立つか、それについて深く考へた科学者などゐまい。外国文学を専門としながら、キリスト教に無関心でゐられるといふことも考へてみれば奇妙な現象だ。「西洋」を学んだ様々の専門家が、互に共通の広場をもたないひとつの理由も、個々の部分は学んだが、背景となる二大源泉思想に無関心であつたからではなからうか。

私自身もむろん同様の状態にあつた。しかし「西洋の智慧」にふれようとする以上

は、いま述べた点をどうしても無視出来ない。今まで自分なりに読んできたところから、まづ聖書からはじめて、心にとゞめてきたものをしるしてみよう。旧約の「出エジプト記」に出てくるモーゼの十誡から始めたい。キリスト教の根源がこゝにあるからだ。

*

一、汝わが面の前に我のほか何ものをも神とすべからず。
二、汝己のために何の偶像をも彫むべからず。
三、汝の神エホバの名を妄りに口にあぐべからず。
四、安息日をおぼえてこれを清く守るべし。
五、汝の父と母を敬ふべし。
六、汝殺す勿れ。
七、汝姦淫する勿れ。
八、汝盗む勿れ。

九、汝その隣人に対して虚妄の証拠を立つる勿れ。

十、汝その隣人の家を貪る勿れ。

シナイ山上でモーゼがエホバから受けたといはれる「神の十誡」の要約は右のとほりであるが、まづこの表現について、内村鑑三の次のやうな解釈を注目したい。

「ヘブライ語の尊きは深遠なる思想を簡潔なる語をもつて発表し得るところにある。故に霊魂のこと、道徳のことを言はんと欲してヘブライ語にまさるものはない。その強き一語の中には我等の二、三語を包含せしむることが出来る。而して右の十誡中多数は極めて簡単なる言語である。『汝殺す勿れ』と言ひ、『汝姦淫する勿れ』と言ひ、『汝盗む勿れ』と言ふが如き何れも僅か二語を以て言ひ表はさる、即ち『汝殺す勿れ』は lo tirzah である。その他何れも皆 lo『勿れ』の字を以つて始まり、而して力ある短き語、之に続いた。故に二枚の石板上この力強き lo の語が厳然として羅列したであらう。斯る律法を手にとりてモーゼがシナイ山より下り之をイスラエル全民衆の目前に発表せしときの厳粛さは能くこれを想像することが出来る。十誡実は十語（ten words）である。十

語を中心として綴られし簡単にして強烈なる律法である。」（『著作集第十一巻』より）

鑑三がまづ言葉の問題、その表現力を指摘したことは正当である。それは直ちに神のものだからだ。「はじめに言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なりき。」と「ヨハネ伝」の冒頭にあるやうに、それは神の生命の端的な表現であり、またその性格を如実に物語るものである。

仏教における如来は周知のとほり慈悲の権化である。救ひを求める対象に化身してその苦悩を抜き、信心を与へることによつて平安に帰せしめようとする。激しさは内在的であり、むしろ衆生とともに悲しむといつた悲哀感を伴ふ。これに反してエホバは何よりもまづ怒りの神である。嫉妬心、復讐心すら抱く神である。たとへば「出エジプト記」の十誡の第二条に「我エホバ汝の神は嫉む神なれば、我を悪む者にむかひては父の罪を子にむくひて三、四代におよぼし」と言つてゐる。さきの「汝己のために何の偶像をも彫むべからず」につゞいて出てくる言葉である。父の罪を三、四代にまで及ぼさうといふほどに嫉妬ぶかい復讐の性格をもつ神で、この点は仏教における如来と甚しくちが

つてゐる。

尤も仏教においても、たとへば大無量寿経の有名な十八願に、「五逆」と「正法を誹謗する」ものは仏によつて摂取されないと記してはある。しかし罪の重きを知らしめることによつて、逆に一切をもれなく救はうといふ大慈悲のあらはれだといふ風に親鸞は解してゐる。背くものを徹底的に糾弾しようといふ復讐的な執念深さはない。こゝで当然問題になるのは、それではエホバの愛とは何かといふことである。

エホバの愛は、はじめから赦すための愛ではない。十誡に示されたやうに、まづ神の正義をうちたて、その正義が実行されるかどうか、実行されないところに対しては容赦なくこれを裁断するといふ、云はゞ神の義が中心である。その愛とは義の愛である。愛の故に「義」はいさゝかもゆるがせにされない。この峻厳な精神が十誡の端的で簡潔な言葉によく出てゐると思ふ。同時にキリスト教に固有の「非寛容」がこゝにみられるであらう。それは頑固とか偏狭とはちがふ。「義」のために妥協をゆるさない精神である。人間がこれを行使するときはむろん危険だ。あくまでも神の義であり、人間として

はそれへの祈りと随順がゆるされるだけであらう。

＊

次に十誡を分析してみると、はじめの五ヶ条は人間の神に対する義務を述べたものであり、後の五ヶ条は人間の人間に対する義務を述べたものであるといはれる。

まづ第一と第二を通じて感ぜられることは、唯一の神に対する帰依の絶対性が要求されてゐることである。ギリシャにおいても、また日本においても、宗教は多神教的である。様々な神が存在し、またそれに対する解釈も各人の自由意志による面が多い。これはある意味では信仰の自由性を保つ上に大切なことにちがひないが、しかしそのために信仰が純化されるかどうか、反面の危惧が出てくる。各人のほしいままな解釈がはびこり、人間の心が分散する危険が生ずるのではなからうか。

これに対してエホバの神は強烈な統一力を振ふものである。エホバ以外の何ものをも神としてはならず、また各人は自己のためにいかなる偶像をもつくつてはならない。信

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook